

● 綜合日本佛教史 橋川 正著

昨秋不慮の病の爲に齡漸く不惑を過ぎた許で亡くなつた大谷大學教授橋川正氏の遺稿が此度氏の同僚にして生前親交のあつた徳重淺吉氏並に門弟達の手によつて公刊されるに至つた。これは著者の大學に於ける講案であるが、生前既にその發表を企圖し、その外遊以前より稿を起して歸朝後なほ匆忙の間筆を擱かなかつたものであるといふ。不幸にしてその稿未だ全く成るに及ばずして急逝されたことは何よりも著者自身の最も本意とされた所であらうが、今校訂者にその人を得てかく整つた形を與へられるに至つたことは洵に以て限すべきことであらうと思ふ。われ／＼は同じく繁忙の中にあつて煩しい校訂の勞を執られた徳重氏以下の諸氏にまつ衷心感謝の意を表したい。

著者橋川氏の學問、その史風に就いては卷頭に氏の恩師西田博士の略敘されたものがありまた舊著「日本佛教文化史之研究」〔日本佛教と社會事業〕その他によつて既に人の知るところであるから、今茲に繰返すことをしない。たゞ本書通讀に際しての一二の所感を述べるならば、第一にそれが著者の講案であることの爲に極めて心易い感じを興へることである。嘗に行文の平易であるばかりでなく、書物そのものを氣輕く手にすることが出來讀むに從つてその内容が素直に頭に入つて行くことである。些細なことながら用ひられた活字や組み方の美しさなども之を助けてゐるのであらう。次には同じくそれが講案であるこ

とから、特に嶄新な所説や卓抜の創見といふが如きものは見られないとしても、世の通説として一應何人も知つておくべき程のことはいづれも要領よくその記述の中に入取られてあることである。かやうなことはたゞ著者のやうな老練な教師にして始めてよくしうることであらう。第三には、それに關聯して、それ／＼の場所に於いてその事に關係ある事項が便宜關説されて更に進んだ研究への緒が興へられてゐることである。それが爲に全體の敘述の體裁に於いて時に繁簡その比を失すると思はれるやうなところもないが、それは學校の講義に於ては普通のこととして、われ／＼は寧ろその實際上の便宜をうれしく思ふ。たとへばその所々に挿入されてゐる關係論文の註記の如きもそれによつて裨益を得るのは唯初學者のみではないであらう。なほ附録として添へられた神道と佛教、佛教と日本精神、佛教と藝術の三編は挿入の圖版と相俟つて本文の所説を補ふところが多い。(本文五九八頁、圖版一六、東京目黒書店發行、定價六・〇〇)(以上 柴田)

● 日本史籍名著解題 松本彦次郎著

囊に「鎌倉時代に於ける宗教改革の問題」〔日本宗教運動〕等獨自の見解に富む論文を公にせられたる著者が、今回現代史學大系の叢書の一として、本書を執筆せられ學界に提供せられたるは誠に喜ばしき事と云はねばならない。

著者は本書の節を分つて(一)辭と記錄の二表現形(二)表現と

しての史學(三)現實の告白(四)理亂の時代(五)古典と復古日本精神(六)變轉期の六とし古事記及六國史より伊達自得の大勢三轉考に至る三十餘種の代表的史籍をあげて之を論じたが、著者は殊にそれらの原著者の史觀を見んとした。従つて史籍もこの立場から選擇され、これらの史料としての價值、表現の態度、原著者の生活せる時代とその影響と云ふものが深く顧みられてゐる。然し著者のこゝに使用まる史觀なる語は *Geachichtsanfassung* ではなく、むしろ原著者に於ける *Historischer Sinn* なる意味である。

本書を通讀して直ちに感ぜらるゝことは、著者が常に熱情ある筆致を以て論じてゐることであり、源氏物語に就ては、紫式部は歴史を以て生の流轉を表現すべきものと考へたし、かゝる態度の下に作られたる源氏は「生の表現としての歴史であり藝術であり」それら更に「詩であり現實性の歴史觀である」と論じたるが如き、又愚管抄に於ては著者年來の蘊蓄を傾けて、史的原理としての「道理」を鮮明したるが如き、或は山鹿素行の中朝事實の事實なる語にも注意したるなど讀者をして多大の興味を感ぜしめ、示唆を興ふるもの寔に妙しとしない。著者は又緒言に於て日本史學史研究の困難を述べ、本書は「史觀の綜合的發展を豫想しない乍らも、箇々の史籍を論ずる爲に原著者の思想と史觀とを絶えず念頭に於いて」論じたと云つてゐるが史觀の發展的考察にも努力したことは本書の諸所に窺ふことが出來、史籍解題としての本書に史學史的性質をもつものを與へて本書

の價值を大ならしめた。

然し一面各史書を論ずる著者の自由なる筆致と、用語の概念の不明確が、あるわざはひをなせる事も見逃し得ない。一例をあげれば上述の源氏物語論の如きは著者の歴史學に就ての見解には尙論議を要するものがあると考へられるが、更に史觀の考察と云ふ著者の態度からすれば本書の節の分け方にも、著者の新しく推薦せる史書に就ても今一應考へ直さるべきものがあるであらう。云はゞそれらの論述に於ける統一なるもの、缺如が指摘さるべきである。けれども本書が箇々の論述に於て、極めて優れたるものを有してゐることはこれらの瑕疵をも補つて充分であり、隨所に示されたる著者の卓越せる見解に對して、筆者は深甚の敬意を表するものである。(前田一良)

#### ●大唐大慈恩寺三藏法師傳、同校異索引

東方文化學院京都研究所發行

普通慈恩傳として呼ばれて居る此の大唐大慈恩寺三藏法師傳の有する史料の價值の重大さは今更茲に云ふ迄もあるまい。其の唐の貞觀未建立の撰せる前半五卷が、大唐西域記と共に單に、唐代に於ける西域印度の狀態、並に其等と唐との交通等に關する必要不可缺の文獻であるのみでなく、更に垂拱四年彥棕の次げる其後半五卷と共に、之又當時の譯經事業より廣く佛教並に其れに關連する一般社會狀態を把握せんとする爲には必須缺くを得ざる史料たる事は斯界の齊しく認むる處であり、吾人が唐